

## 狭衣物語の神

大原, 一輝

<https://doi.org/10.15017/12199>

---

出版情報 : 語文研究. 30, pp.30-40, 1971-03-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 狭衣物語の神

大 原 一 輝

狭衣物語は、之を宗教思想の上から見る時、例へば主人公狹衣の志向、飛鳥井姫君の物語の顛末、嵯峨院・女二宮の出家、一品宮の落飾等主要人物の動向からしても仏教的な傾向が可成り濃厚に窺へるのであるが、神祇觀念もまた軽視し難いものがある。蓋し文芸作品中に「神」の見出せることは記紀万葉の上代作品に於てはいふまでもないが、平安朝の作り物語に限つても、源氏物語については既に多屋頼俊博士の「源氏物語の神」(「源氏物語の思想」所収)に詳しい。しかしその他を総索引類(註)によつて見ると、竹取物語(神八、鳴神一)、平中物語(神三)、落窪物語(神仏二、仏神二)、浜松中納言物語(神一、河瀬神一、神仏一、仏神一)、堤中納言物語(なし)等で、夫々の特色は指摘し得るものの、作り物語に見られる「神」は極めて少ないといはねばならない。之に対して狭衣物語では「神」はもとより、神事、神の縁語にまで至ると夥しいものが見出せるのみならず、神が作品上積極的な活動を示してゐる所に大

きな特色がある。例へば、度重なる神の示現の如きは、その最たるものであるが、鎌倉期の無名草子では、「大将の笛の音めでて、天人の天下りたる事」、「源氏宮の御もと、賀茂大明神の御懸想文遣はしたる事」、「齋院の御かうとのなりたる事」、「大将の帝になられたる事」等を、「さらでもありぬべき事ども」としてその不自然さが強く非難されてゐる。何れも天稚御子、賀茂明神、天照神等の示現が見られる箇所であつて、眞実を尊ぶ無名草子の作者からすれば、看過し難い所であつたと思はれる。しかし、この物語の當時にあつては、夢兆託宣の如きは精神生活上、事実として信じられてゐたことであり、勅撰和歌集でも、拾遺集から見られ始めた神詠歌が、下つて新古今集神祇の部に至ると十数首にも及んで採られてきてゐるのであるから、そのやうな時代傾向からしても荒唐無稽なものとして一概に非難しおほせるものではない。のみならず、これらの神の積極的な示現は、殊にこの物語の基調をなす主人公狹衣の深い咏歎懊惱の世界を喚起形成するに至り、「神」はその頻出度に於てのみならず、作品の内面的本質的な面にまで関与するもの

として注目されねばならぬものがある。そこで、以下このやうな狭衣物語の神について、その文芸的意義を確めてみようと思ふのである。

## 二

狭衣物語に見られる多くの神の中には、物語上全く積極的な活動を示してゐない神も少くはない。そのうち、先づ神名の明かな神としては、葛城の神、糺の神以下の神々が見られる。何れも古来人口に膾炙してゐる神であるが、この物語の中では、格別人々の篤い信仰の対象として採り挙げられてゐるのも、物語の筋にかゝる重要な活動を示してゐるのではない。ただ修辭上の用例に留まつてゐるものである。

例へば、「岩橋をよるくゞだにも渡らばや絶えまやおかむかづら木の神」(巻二の上)、「葛城の神のさかしらにや」(巻四の中)等に見られる葛城の神は、夫々狭衣が女二宮、宰相中将の妹との後朝の別れの詞に見出され、夜毎に忍び来たきわが身を神に擬へたり、夜明けの近づきたるを知らされて戯れた詞として用ひられてゐるものである。何れも葛城山の一言主神の伝説を踏まへたものであることはいふまでもなく、日本霊異記(上巻第二十八)、今昔物語(巻十一の三)、水鏡等の記事や拾遺集の歌(国歌大観番号七一九、一二〇—以下同じ)が諸註の引く所となつてゐる。この神はこの他にも古事記(下巻)、源氏物語(夕顔、若菜下)、後拾遺集(二六一)、和泉式部日記(五一—九)等物語、歌集、日記類にも屢見出され、枕草子では三巻本一七九段の中宮定子の詞「葛城の神もしばし」をはじ

め、一三三三段の藤原行成、一五七七段の藤原齊信の詞にも見られる所から、広く文芸的表現として慣用膾炙されてゐたものであることは明かである。しかも、その多くは伝説を踏まへた比喻として用ひられたもので、狭衣の場合もそのやうな修辭上常套化された用法の域を出るものではない。

また、糺の神は、糺の森に坐す賀茂の神を指すことはいふまでもなく、この神は物語中でも最も顕著な活動を示す神ではある。しかし、この神は物語中でも最もひきかけて、さだくゝとあきらめさせ給ふべきならねば」(巻三の中)とあるのは、一品宮との噂が立てられ困惑した狭衣についての叙述箇所であつて、賀茂の神に対する狭衣のおもはくや更には一品宮が齋院であつたことにもよるとはいへ、敢て「糺の神」を持ち來つた所には、寧ろ「あきらめ」との縁語關係によるものがある。また狭衣が宰相中将の妹との噂について弁解する詞「ただすの神にも憂へ奉らまほしかりしものかな」(巻四の上)に於ても矢張り「なき名」も「糺す」の同様な用例であることは明かである。この神についても諸註、大和物語(七五一)、平中物語(三四段)、源氏物語(須磨)等を挙げてゐる他、新古今集(二二〇、一八九—)にも見え、殊に枕草子一七九段の「いかにしていかに知らましいつはりを空に糺の神なかりせば」等に大方の親炙の程が窺はれる。要するに狭衣物語のこのやうな神々は、登場人物の信仰上、或は物語内での活動上から殊更特筆されたものではなく、古来人口に膾炙し極めて文芸的な背景を持つものながら、何れも比喻、縁語等の修辭的用法の域内に留るもので、未だ物語の本質にかゝる重要な働きを示すには至つてゐないもので

ある。

以下同様の修辭的用例と見られる主な神について、その膾炙の程が窺はれる狭衣物語前後の主要作品と共に列挙せば、「立田姫の人わきなどしたるにはあらじ」(卷二の上)といふ狭衣讚辭に見られる立田姫—古今集(二二九)、後撰集(三七八)、拾遺集(一一二九)、千載集(二六四、三五六)、新古今集(五四四)、源氏物語(帚木、少女)——「結ぶの神さへ恨めし」(卷二の下)といふ狭衣の源氏宮讚歎や「さきの世より結ぶの神のしおき給へる御契」(卷三の中)といふ一品宮との仲を歎く詞に見られる結ぶの神—日本書記(卷二)、拾遺集(一一六五)、詞花集(二〇四)——、「柏木の葉守の神になどてわが雨もらさじとちぎらざりけむ」(卷三の中)といふ狭衣の女二宮に対する歎きに見られる葉守の神—後撰集(一一八四)、金葉集(二三〇)、新古今集(二三〇)大和物語(六段)、源氏物語(柏木)、枕草子(三八段)——、「春日の神もいかがおぼさむ」(卷四の上)といふ藤壺立后を難じた人々の詞に見られる春日神—源氏物語(行幸、紅葉賀)、枕草子(二八七段)、梁塵秘抄(卷二)——等である。

次に、神名が明示されてはゐないが、神の存在又は神威の意識されてゐる、神に由縁の深いものが見られる。信太の杜、しるしの杉以下が之であるが、その用法に於ては何れも前項の神の場合と同様なものが見られる。例へば、狭衣について「信太の杜の千枝は物にもあらずなり給ひ」(卷二の上)といはれてゐる信太の杜は和泉の国に在り、諸註の挙げる所でも詞花集(三六四)や古今和歌六帖(第二)を引歌とするものであつて、之が膾炙してゐたことは、この他にも後拾遺集(一一八九)詞花集(

二九四)、千載集(一〇七)、新古今集(三〇七)等に見られることでも知られる。要するに狭衣の物思ひの繁さをいはんがため古歌の比喩的引用に過ぎない。また「たづね見るしるしの杉もまがひつ、なほ神山に身やまどひなむ」(卷四の中)といふ狭衣の歌の「しるしの杉」については、諸註、古今集(九八二)の読人知らずや古今和歌六帖(第二)、梁塵秘抄(四五六)の三輪明神の神詠歌を挙げてゐる。蜻蛉日記(上)や更級日記、千載集(一一七五)には稲荷の杉の信仰が窺はれるのであるが、狭衣は矢張り三輪の御歌によるものである。更にこの中の「神山」は「この神山のまどひ」(卷四の中)ともいはれ、源氏宮をあらはす語であるが、之も三輪の古歌によるイメージの重複に効をねらつた用法であることは明かである。「しるしの杉」は以上の他、拾遺集(四八六)、宇津保物語(藤原の君)、落窪物語(卷三)、源氏物語(賢木)、枕草子(二二九段)等にも見られる。以下前項同様に示せば、「限りなき御歎の森のしげさよ」(卷二の下)に見られ、懸詞、縁語による狭衣の深い歎きの形容語として用ひられてゐる歎きの森—古今集(二〇五五)、金葉集(四七七)、栄花物語(三二七)、堤中納言物語(ほどく)の懸想)——、「飽かざりし跡や通ふといそのかみふる野の道を探ねてぞ見る」、「いそのかみふるのの道を探ねても見しにもあらぬ跡ぞ悲しき」(卷三の下)といふ狭衣と女一宮との唱和に見られる枕詞いそのかみ—古事記(中卷)延喜式神名帳、万葉集(一九二七)を始め古今集(六七九、八七〇)、拾遺集(八六七)、源氏物語(御法)、蜻蛉日記(中)、更級日記—等がある。何れも古歌の引用を始めとして矢張り固定化、観念化された修辭的用法の範囲を出

づるものではない。

次に狭衣物語の神の中には、外来神その他の神靈にか、はるものも少くない。物忌、土忌以下の陰陽道の神にか、はるもの物のさまたげ、物怪等の正体不明の不可思議な靈力をあらはすもの等である。これらも当時の文芸作品に頻出することは例示するまでもなく、また現実にも堅く信じられ、行はれてゐたものであることは明かである。例へば、筑紫に欺かれて下る飛鳥井姫君とその乳母との対話中に屢見られる「土忌」、「土公」（巻一の下）、齋院卜定の儀の「御占」（巻二の下）、女二宮懐妊の際に見られる「もの」とひ、「ものけ」（巻二の上）等には現実の人々の信仰生活そのまゝの反映といへるものが窺はれる。また「あらみさきはなたぬ人」といひ、「物のさまたげのし奉るなんめり」（巻一の下）といふのは、飛鳥井姫君のやうな容易に他人に靡かうとしない固陋な性格の人に対する世評で、魔性の働きを信じた人々の詞として見られるものである。要するにこの種の神にか、はるものについては、当時の人々の日常信仰生活の一端がそのまゝ、投影されてゐるものとして、前項までの修辭的な「神」の用例に比すれば、より現実的な宗教的色彩が濃く窺はれるものではあるが、物語上、格別神の働きが見られるものではない点、同前であるといはねばならない。

ただこゝで一二注目されるものとして「物怪」と「物忌」を採り挙げて見ると、先づ「物怪」は、源氏物語では夕顔や葵の巻を始め真木柱、柏木、手習の巻々にも見られて、物語の構成上及び内容上からも殊更重要な働きを示してゐることは周知の通りである。しかし、狭衣物語では前掲女二宮についての場合

はもとより、例へば巻四の中の場合でも、「女院御物怪だちていとおもくわづらひ給へば」とあるに留り、物怪についてそれ以上の物語的發展が見られるものでもなければ、前後の事件との関照照応が見られるものでもない。ただ単に一品宮の御母である女院に障りのあつた事を報告的に示してゐるに過ぎないものである。従つてこの場合の「物怪」については、これ以上格別の物語的意義が認められないだけでなく、物語上、格好の素材となり得るものながら、敢て活用せずにゐる所には、後に述べる特定の神々を除いて、作者が無作為に不可知の世界を語らうとはしてゐないことが窺はれて注目されるのである。他方、「物忌」は所謂飛鳥井姫君の物語に見られる。即ち、「物忌」を理由に一夜姫君を訪れなかつた狭衣は、以後永遠に姫君を見失ふに至るのであるが、こゝでは「物忌」が悲劇の偶発的契機の一つとして巧みに採り挙げられてゐる点が注目される（巻一の下）。しかも之は、後日姫君入水の話聞かされた狭衣をして「折しも心づきなかりし物忌よ」（巻二の下）と深く歎かせてゐるのであるから、この照応的な狭衣の慨歎によつても「物忌」は非劇譚としての飛鳥井姫君の物語に於て大きな役割を果してゐるものといへるのである。また、この物語が全体の傍流的位置にありながらも、はかなくあはれな世界を描き得て後世喧伝される所以も理解されるのである。しかし、こゝでも格別天一神や金神が活動する訳ではなく、物語上、神の積極的具体的活動といふ点からすれば、矢張り次の神々に比すべくもないのである。

次に物語の中で顕著な具体的活動を示す神について見ると、先づ天稚御子が挙げられる。天稚御子は、作り物語の中では、早く宇津保物語俊蔭の巻に見られるのを始め、梁塵秘抄の二句神歌にも詠はれてゐることは周知の通りである。狭衣物語では、狭衣の笛の音に賞でて天降る場面は、この物語に於ける神仏の示現の最初のものであるばかりでなく、最も具象的且つ浪漫的なものとして極めて印象深いものがある。そこでこのやうな御子について注目すべき点を挙げて見ると、先づその降下は、決して唐突なものではなかつた。既に巻一の上の降下以前に於て、狭衣についての「天稚御子の天降り給へるにや。今日や天の羽衣むかへ聞え給はむ」といふ父堀川大殿の危惧の詞の中に見られる。従つて茲にその降下の伏線の要素が窺はれることは注目されるのであるが、しかしこの場合の「天稚御子」には寧ろ狭衣の優れた容姿才芸に対する比喩的讃辞としての要素が濃厚に窺はれる。御子降下以前の狭衣の「すぐれてこの世のものとも見え給は」ぬ状については、この他にも父大殿からは「第十六我釈迦牟尼仏と、この世の光の為と、げに顕はれ給へる」と思はれ、笛の才については「月の都の人もいかでかは驚かざらむ」と述べられ、帝からも「天人の天降れるならむ」とまで思はれてゐる。何れも狭衣が釈迦、月の都の人、天人等に比況されたり、それらをも魅了させずには措かぬ人物として讚美されてゐるものである。従つてこの間に見られる「天稚御子」については、こゝに並称されたものと同様、「この世ならぬ」ものの比喩

的象徴的讃辞の一つとして挙げられてゐるものであつて、必ずしも降下の必然性や伏線の要素が強調されてゐるのではない。要するに降下前に於ける御子については之までに見られた修辭的用例に属するものが認められるにすぎないのである。

次に降下の場面を中心に御子の宗教的性格について見ると、可成り神以外の要素を附与されたものとして描かれてゐる。先づ上述の讃辞類に就いてみても、仏教の来迎思想、垂跡思想、（註） 仏教の天人、月宮殿等仏教的色彩の濃いものが多く、「御子」もそれらと同じ觀念下に於て並称されてゐるやうに思はれる。また、降下の場面は「虫の声々いと近うなりて、紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、角髪結ひていひ知らずをかしげなる童の、装束うるはしくしたる薫しきもの、ふと降り来るま、にいとゆふか何ぞと見ゆる薄き衣を、中将の君にうち懸けて袖を引き給ふ（巻一の上）のであるから、この降下の具象的な姿態、雰囲気等の描写面に於ても極めて仏教的な色彩を強く指摘出来るのである。こゝに御子は仏教的世界のものとしての感が強いのであるが、反面「いとゆふか何ぞと見ゆる薄き衣」や昇天を引留めた帝の歌の「天の羽衣」といふ詞等には上代の羽衣伝説を偲ばせるものが窺はれる。また、この際の「いなづまの光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかげはし」といふ狭衣の歌には、その使用語句、語調からして必ずしも仏法礼讃、欣求浄土の志向が窺はれるとはいひ難いものがある。更に古今集の序には和歌が鬼神をも感動させる働きがあるとする考えが見られることは周知の通りであるが、狭衣の才芸が神をも感動させずに措かぬものであつたことは、後日、神樂の夜「明星謡ひ給へ」るに、

「神も耳とゞめ給ふらむ」(巻三の下)とも述べられてゐる。また、今昔物語集巻十六には天童が賀茂の神の使徒として描かれてゐる記事も見られる。従つて狭衣の笛に賞でて舞ひ降りた「をかしげなる童」は古事記(上巻)に見られる天若日子や日本書紀(巻二)の天稚彦、祝詞(遷却崇神)の天若彦そのものではないにしても、天津神の御子として神性を有するものであるといふことは出来るであらう。茲にその降下は矢張りこの物語に於ける神の示現の最初のものであると見て妥当を欠くものではないと思はれるのである。

次に降下後に見られる天稚御子について見ると、狭衣は「音に聞きし天稚御子とかや見てしがな」(巻二の上)等と矢張り人人の讃辭を受けてゐるのであるが、こゝで注目されるのは、狭衣自身の御子に対する強い思慕憧憬の情が頻りに見出せることである。そこでは単に「御子」又は「天人」なる呼称でも見られ、例へば源氏宮への思ひの叶はぬ狭衣には、「御子の御ありさまの面影に恋し」く、「ありつる御子の御かたちも面影に恋し」(巻一の上)を始め、既に飛鳥井姫君を見失ひ、女二宮も出家し、源氏宮入内の噂を聞いてからは、「かの天くだり給ひし御子」が幾重にも想起されてゐる(巻二の下)。更に源氏宮は既に齋院となり、一品宮との仲も疎縁になるにつれ、「ありし天稚御子におくれ給ひけむ悔しさ」も一方ならぬものがあつた(巻三の中)。かやうに天稚御子は、天上への誘ひに応じなかつた狭衣に、「この世」に留つた悔悟や「御子の世界」への強い憧れを喚び起させるに至つてゐるのである。要するに始め主人公狭衣の比喩的讃辭的用法に於て見られた天稚御子は、その降下に於て

この物語に於ける神と人との最初の出会いの場を見せ、その極めて浪漫的な雰囲気はそれだけに留らず、以後狭衣の「恋し」「悔し」といふ憧憬慨歎の情をかき立てこの物語に抒情的咏歎的世界を強くかもし出してきてゐるのである。茲に天稚御子の特色は最もよくあらはれてゐるものといはねばならない。

しかし、かゝる狭衣の深い歎きは御子の誘ひに対する拒絶に因るものであるとはいへ、それが直接御子の積極的な活動や意志によつて齎されたものではない。もとより御子は天上からの降下、狭衣の誘引といふ活動を見せたのであるが、狭衣をして「この世」の歎きに沈ましめ、「この世」ならぬ世界への憧憬を強めしめてゐる更に直接強力な神の働きかけといふ点からすれば、矢張り次の賀茂の神や天照神が注目されねばならない。さうしてこの神々の狭衣への働きかけは、先づ意中の人源氏宮の齋院卜定が賀茂の神の託宣によつて決せられる(巻二の下)。次いで世をはかなむ狭衣遁世の志は神殿鳴動に続いて「さるは珍しき宿世もありて」と同じく賀茂の神によつて阻止され(巻四の上)、終には天照神の「たゞ人にはありがたげなる宿世ある様なめる」といふ夢兆によつて受禪させられ遁世の実現も源氏宮との間も愈遠ざけられてゆくのである(巻四の下)。神は狭衣の「宿世」を洞察し彼の「本意」も再参に亘つて阻碍し、歎きの深淵に呻吟させるに至つてゐるのである。尤も狭衣の「この世」の歎きは生来の厭世観や優柔不断な彼自身の性格や行動等に根ざす不如意、就中飛鳥井姫君以下の女性達との齟齬も絡み合つて深まつてきてゐる。従つてこれらの神はそのやうな歎きの内因的なものに対する外的なものとして、その積極的な働きかけ

が大きく注目されるのである。

所でこの神々の活動の顕著なことは、物語中に夥しく見出される「神」なる語の用法に於ても認められる。例へば、狭衣物語に於ける普通名詞として見られる「神」については、「神仏」（巻一の下）、「仏神」（巻二の上）等の如く、漠然と仏と並称され、殊更特定の神が意識されてゐない場合も屢見される。しかし単独で用ひられた「神」といふ語はもとより、「八百萬代の神」（巻三の下）、「八島守る神」（巻四の下）、更には「あらぶる神」（巻四の中）といふ場合に於ても、特定の神、即ち賀茂の神や天照神或はこの二神を中心とした神々を指す場合が極めて多く、殊に賀茂の神についてはその大半を占めてゐる。また、神事について見ると、神事（巻二の上）、大嘗会（巻二の下）、大原野、春日、平野の行幸（巻四の下）等も見られるが、齋院の御わたり、御禊、祓、齋院の相嘗、神樂、賀茂の祭・行幸等延喜式（巻六齋院司式）に見られる齋院に関する祭儀行事にか、はる記事が殊に巻二の下、巻三の下を中心に多彩に見出される。この事は、神そのものの働きを直接示すものではないにせよ、また女主人公源氏宮が齋院となることより至当であるとはいへ、矢張り賀茂の神がこの物語の神の中では最も注目されるべきものであることを示してゐることにならう。更に神の縁語といふ点から見ると、葵、榊、神垣、木綿、注連等夥しいものを指摘出来るのであるが、之も賀茂の社頭や齋院にか、はる場面に於けるものが圧倒的であることはいふまでもなく、矢張り軽視し難いものといはねばならない。かくてこの物語は、賀茂の神やその由縁の神事、縁語が殊に目立つ所に特色が認められるのである

が、纏つて作者としては、飽くまでかゝる神や神事そのものを描くことに窮極的意図があつた訳ではない。例へば、齋院関係の神事が多彩に採り挙げられてゐるとはいへ、「例の作法の事ども思ひやるべし」（巻二の下）、「例の作法なり」、「例の事にて思ひやるべし」、「かく書き続けたるよりは、見るはめでたくこそはありけめと思ひやるべし」（巻三の下）等と省筆が少からず見出されることでも明かである。作者は神や神事そのものを描くことより、矢張り「この世」の人の状を描かんとしてゐることはいふまでもなく、そこにまたこの物語の上代神話や中世の靈驗譚との本質的な相違点も認められるのである。従つて物語中最も活動著しい神についても、この世の「人」とのか、はりの下に考察されねばならぬことはいふまでもない。そこで次には、この物語の神の中でも頻出度高く、最も活動的な賀茂の神を中心として物語の主要人物との関係を、しかも主として「人」の側から眺めてみようと思ふ。

#### 四

物語中の人物の神に対する態度については、既に多少とも触れて来た所ではあるが、中には女二宮の如く早くから仏門に帰依し、神とは全く無縁となる人もあつて必ずしも一様ではない。そこで、此処では男女主人公と堀川大殿夫妻を採り挙げて考察を続けることとする。

先づ狭衣の両親堀川大殿夫妻の神に対する態度から見てゆくと、その特色は齋院親によく現はれてゐる。例へば、齋院となる源氏宮を慰めて堀川の上は「尼にならざらむかぎりは、いかに



でか覚束なき程にはなし侍らむ。行末の事を思ふこそくち惜しうは」と述べてゐる(巻二の下)。こゝには容易に浮言を近付けない神の世界の厳肅さを容認する一方、仏の道に入り難くなる歎きが窺はれる。また大殿の「たゞ仏の御かたざまを背き給へるのみぞ、後の世の爲口惜しき事に侍り。そもそも女の御身は齋宮齋院にさだまり給はずとも、三千大千世界を照す玉の行方知らずは、仏になり給はむことかたくこそ侍らめ。さるは三十二相も、いとよく具り給ひて、ほとけの御用意もくはへたまひつべき様ぞ見え給へる」(巻四の上)といふ詞でも仏教的視点に立つた女性観、就中齋院観からは、源氏宮の齋院就任を「口惜し」といふばかりでなく、最後には矢張り仏への期待に心寄せてゐる口吻が窺へる。かゝる観念は、嘗ての齋院奉仕を「年頃罪深きさまなりつるを」(巻三の下)といふ前齋院女一宮の詞にも見られるもので、当時一般の宗教観念の反映と考えられるものである。

また大殿夫妻は神と狭衣との間にあつて神意伝承の仲介的役割を果たしてゐる。先づ源氏宮齋院卜定の折は「殿の御夢にも、賀茂よりとて祢宜とおぼしき人」があらはれ告げる(巻一の下)のを始め、狭衣出家決行の際にも、先づ堀川の上に「神のこの頃、夢にうちはへて見」え、神殿鳴動後は殿に「この頃夢のさわがしう」て(巻三の下)、賀茂の神が「夢ともなく見」えさとするのである(巻四の上)。また狭衣受禪の神託の場合にも、「天照神の御けはひ、殿の御夢にもうちしきり御覽せ」られてゐる(巻四の下)。狭衣に対する神の意向は何時の場合にも、先づこの大殿夫妻の夢の中に告げ知らされてきてゐるのである。

しかし、大殿夫妻には、かゝる一般的な仏本神祇的態度や神意伝承の単なる仲介的役割のみが見られるのではない。神に対しては格別真摯敬虔な信心の程が注目されるのであつて、例へば人々の噂に「今更に神も公も知り聞えさせ給ふべきにあらず」と思ひもかけなかつた源氏宮託宣の折には、大殿も「いと物恐しく思さ」れ、夥しいものさとしあるを「いとおそろしう思しめし」て、「さまさまの御折ども」を始めさせてゐる(巻二の下)。神殿鳴動事件の前後にも、夢の中に神が現はれなどするを、「いと恐ろし」「いとゞゆ、し」「いとゆ、しう恐ろし」、「ゆ、しういみじ」などと「御心を動し給ふ様斜なら」ず、「御はらへなどせさせ給」ふのである(巻三の下)。また、狭衣遁世の意図を告げ知らせる賀茂の神の夢兆の折にも、大殿は御社の方を伏し拜んでは「神の御心おろかには思ひ聞えさせ給はず、源氏宮に向つても神に感謝の祈禱をさせ、自らの御折どもも「いとちた」き程であつて(巻四の上)、何れにも神威に対するひたすらなる恭敬畏懼の真情がよく窺はれる。しかもその信仰心は我が子狭衣や源氏宮の折々の身の上を案する愛情が基底となつて愈その深まりを見せてゐるのである。かゝる狭衣に対する愛情は、既に冒頭から窺はれたもので、天稚御子の誘引の折はもとより、狭衣の時と共に深まる遁世の志をも屢躊躇させた強い親子の絆であるが、それだけに狭衣にとつては桎梏でもあつた。要するに大殿夫妻の神に対する信仰心の基底をなす強い愛情は、常にかゝる夫妻を通して狭衣に及ぼされる神意にも劣らず却て狭衣を拘束するものとなつて、愈その歎きを深めさせられてゐる所に注目すべきものがある。

次に源氏宮について見ると、彼女が一貫してこの物語の女主角であることは、「室の八島」(巻三の中)、「みたらし川の面影」(巻四の中)、「神山のまどひ」(巻四の中)等の語で絶えず狭衣から想起され、恋慕の情が寄せられてゐることによつても明かである。また、物語の構成上から見ても、狭衣と他の女性との物語は、年月の経過に伴ふ神事を折目にして絶えず源氏宮との物語に引戻されつゝ進展させられてゐる点でも同断である。例へば、「年返りぬれば、齋院の相嘗」(巻三の下)等といふのは、にもなりぬれば、齋院の相嘗」(巻三の下)等といふのは、いづれも賀茂の祭りのいそぎの場面、神楽の場面の書出しに当る部分であり、夫々それまでの飛鳥井姫君の法会の場面、嵯峨の女二宮の法華八講の場面から源氏宮に話題の転換する箇所である。物語中にはかやうな箇所が少くない。「京には大嘗会など近う」(巻二の下)、「はかなく年もかへりて賀茂のまつりの」(巻四の下)等といふのも夫々女二宮、藤壺との物語からの転換点に見られるものであり、又の年の秋冬は大原野春日平野など(巻四の下)も一品宮薨去の場面から狭衣の源氏宮思慕に転ずる箇所である。かくて、折々の神事を節と見た物語の構成上からも源氏宮が終始女主角であることは認められるのである。所で、この女主人公源氏宮と神、就中賀茂の神との関係は右の引用場面によつても充分窺はれるのであるが、それだけに留らない。源氏宮に「神代よりしめ引きそめしきさかき葉をわれよりほかにたれか折るべき」(巻二の下)と託宣が下り齋院として召される所には、一方ならぬ神の執心が見られるのであるが、ここで源氏宮自身について見ると、進んで神明に奉仕せんとする

積極的な態度が認められる所に注目すべきものがある。即ち、齋院卜定後には、ひたすら「神の齋垣のみいそがれ給」ひ、「みたらし川に褌せさせ給はむ事」をのみ「心もとなく思さ」れてゐる(巻二の下)。また齋院に入られて後も、御前の有栖川に、「おのれのみ流れやはせむ有栖川岩もあるるじ今は絶えせじ」と、殊更「契深く御覽」せられてゐる(巻三の下)。もとよりそこには、「いかでもかゝる事見ざらむ所もがな」(巻二の下)といひ、「うしろめたき御兄の心ばへ」(巻三の下)といふ執拗なまでの狭衣を避けようとする意図が窺はれるにせよ、この源氏宮の神の許への積極的な心いそぎは、既に見られた一般の神祇観齋院観からすれば、矢張り注目すべきものであらう。一方、神もまた、かゝる源氏宮の態度に感応を示さずには措かなかつた。「神代よりしめ引きそめし」賀茂の神は、狭衣の執拗なる追求の場面では「神もいかでおろかに御覽せられむと見ゆるしるしにや人々参れば」、「例の神の御しるしを念ぜさせ給ふに、殿の御声にて」(巻二の下)等と絶えず加護の程が示されてゐる。こゝにかゝる源氏宮自身の神に対する態度は、当初からする神の源氏宮への執心や折々に示された加護とも相俟つて、源氏宮を愈々神の世界に赴かせることになるのである。作者は飽くまで源氏宮を神の領域中の人として仕立てあげ、狭衣から遠く隔離させようとしてゐるのであつて、それは主人公狭衣の限りなく深い歎きを喚び起さずには措かぬものとなつてゐる。源氏宮の神に対する態度にも、この物語の本質面に深いか、はりを持つものとして見落し難いものがある。

最後に最も重視すべきは、矢張り主人公狭衣に於てであつて、

度重なる神の示現によって源氏宮に寄せる本意も、次第に募る遁世の志も共に不成就に終らされてゆくのであるから、狭衣にとつて神の意志は強力絶対的なものであったとはいふまでもなく、それに伴ふ歎きもまた格別なものであった。以下夫々の場合について之を見てゆくと、先づ源氏宮齋院託宣の場合には、「げに神代より筋殊なりける御宿世なりければ、今は中々心やすくて、暮暮妬う心やましき心の中はあらじと胸あきぬる心地し給」ひながら、「こゝらの年頃わが思ひくだけつる筋は、遙なるにこそは」と思はれてゐる。また、「思しとまりし一節こそ、神の御方様うれしう思さ」る反面、「なほむげに、注連の外にかけはなれ果てぬるぞかしと思ひとちむる、いとやらん方なき状である（巻二の下）。即ち神託により齋院となる源氏宮の「宿世」やそれに伴つて入内も取止めとなる「神の御方様」に對しては、「心やすく」、「胸あき」、「うれし」と思す反面、本意たる源氏宮との間の遠く遙なることが幾重にも「やらむ方なく」嘆かれてゐる。神は人の「宿世」を洞察し、深いか、ほりを持つ超越者絶対者として把握されてゐるのであり、そこから狭衣の悲喜交々の感慨、就中「やらむ方なき」歎きが喚起されてきてゐるのである。同様なことは、狭衣が遁世決断の際に於ける賀茂の神託宣の場にも見られる。即ち狭衣は「しひてうき世に在らせまほしくおぼすらむ神も、御心のありがたきものから、かた／＼につらきかたにぞす、み給」ふのである（巻四の上）。こゝでも「神の御心」によつて強ひてこの世に引き留められた事を、「ありがたき」と思ひながらも、源氏宮とは結ばれないばかりか、遁世の素志も遂げられない「つらき」思ひが募

つてきてゐる。更に続く天照神による受禪託宣の場面でも、狭衣の「斯うあるまじき様にさへ、しなし給へる神の御心は、思へばかたじけなく有難く思ひ知られたまふを、一方しも見がたうなり給ひにけるのみぞ、なほ更に恨めしくおぼえさせ給」ひ、「ふさはしからぬ身の宿世と思し歎かる、なかに、齋院を見たまつり給はむことの、今はあり難うなりぬべきくち惜しさ」が示されてゐる（巻四の下）。この場合も登極といふあるまじき様にしなせる神の御心を「かたじけなく」、「有難く」思し知られる一面、わが素志とする遁世はもとより、源氏宮とも一層違ひ難くなる「宿世」の程を、「恨めし」、「くち惜し」等と強く歎かれてゐるのである。要するに何れの場合にも「心やすく」、「胸あき」、「うれし」、「かたじけなくありがたし」等といふ傍ら「やらむ方なく」、「つらし」、「恨めし」、「くち惜し」等といはれてゐる所に絶対的な神意のまにまに拘束され、不本意に終らされる如何ともし難い慨嘆の情が強く認められるのである。

次にかゝる狭衣の心状は、彼の和歌の面に於ても一層明白に窮はれる。即ち物語の全歌數二百八首中、六十余首にも余る彼の独詠歌が注目されてくるのである。殊にその三分の一に及ぶ源氏宮を念頭に置いたものには「神山の椎柴がくれ忍べばぞゆふをもかくる賀茂のみづがき」（巻二の下）、「榊葉にかゝる心をかかへむおよばぬ枝におもひ絶ゆれど」（巻三の下）等を始め折に触れ所につけ、既述の如き神の縁語を用ひた「やらむ方なき」心情が詠まれてゐるのであるが、更に之が神の意志を強く意識して詠まれた歌になると、直接神に對する嗟嘆の偽りなき吐露があらさまに認められる。例へば「みそぎする八百

萬代の神も聞け我こそしたに思ひそめしか(卷三の下)、「かみもなほもとの心をかへり、みよこの世とのみは思はざらなむ(卷四の上)」、「八島もる神も聞きけむあひも見ぬこひまされてふ穢やはせし」(卷四の下)等の如きは、夫々源氏宮院卜定、狹衣の通世挫折、受禪といふ何れも神の示現に当つての、神を直接対象として詠まれた歌である。こゝでは何れも強烈な喚びかけ、命令、反語等の形体を伴つた激しい語調の中に神意に対する歎きが、時には訴願、抗弁、詰問とまでなつて示されてきてゐる。茲に狹衣に対する神の意志が如何に強絶なものとして享受されてゐたか、従つてまた狹衣の神に対する嗟歎慷慨の如何に深刻なものであつたかが更めて強く認められ、神の、物語の基調への深いか、はりが窺はれるのである。

狹衣物語の神はその用例、働きに於て必ずしも一様でないものがあつた。また神の姿態、託宣の詞章、人の神に対する態度等に於ても可成り仏教的傾向が濃く認められはするもの敢て「神」を採り挙げ、「この世」の人に対する働きかけ、就中主人公に対するそれをかく描き出してゐる所に「世とともに物をのみ思して過ぎたま」ふ(卷四の下)狹衣の物語に於ける「神」の意義は自ら明かであると思はれるのである。

註

- 1、山田忠雄編「竹取物語総索引」、曾田文雄著「平中物語総索引」、松尾聰江口正弘編「落窪物語総索引」、池田利夫編「浜松中納言物語総索引」、鎌田廣夫編「堤中納言物語総索引」
- 2、日本古典文学大系・日本古典全書・有明堂文庫「狹衣物語」の頭補註

3、この項、森岡常夫著「平安朝物語の研究」所収「平安朝物語の浪漫的  
精神―特に天人を中心として―」参照  
以上多大の恩恵を蒙つたことを記し謝意を表す次第である。(敬称略)尚、  
引用本文は有朋堂文庫「狹衣物語」に據つた。

正誤表(二十九号 春日論文)

頁	欄	行	誤	正
4	1	上	採色	彩色
4	10	下	葵邑	葵邑
4	12	上	昔撓：枳ノ	昔大撓採：五行之 情石斗様
4	12	下	戌ノ陽	戌為ノ陽
5	24	上	科撒	抖撒
6	6	下	虚薄 蒲様	虚蒲 薄様
6	16	下	伏籠・襖	舟・伏籠
9	7	上	現像	現象
9	7	下	玉里本	黒本本